



日本記者クラブ

研究会「変わるアメリカ・変わらないアメリカ 米大統領選」②

森本 あんり
国際基督教大学教授

2016年3月2日

反知性主義から見た米大統領選挙

アメリカ宗教研究の第一人者で、著書『反知性主義 アメリカが生んだ「熱病」の正体』（新潮選書、2015年）が話題を呼んだ森本あんり教授が、米政治に流れる反知性主義の伝統からみた米大統領選やトランプ現象を語った。

まず「反知性主義は日本では単に相手を非難する時にぶつける言葉として使われるが、特定のアメリカ的な背景がある」「単なる知性への反発ではない。知性と権力との固定的な結びつきに対する反発です」とアメリカの反知性主義を説明した。反知性主義の代表として19世紀のアンドリュー・ジャクソン大統領を詳しく取り上げ、共和党の指名争いをリードするドナルド・トランプ氏と似ていると指摘した。キリスト教と無縁のトランプ氏を福音派がなぜ支持するか、というなぞを問いかけ、「この世で成功するのは神の祝福があるからだ」というアメリカ的なキリスト教の論理がトランプ支持につながる道筋を解き明かした。

さらに、選挙に熱狂する人々、政党政治の危機、欧州のポピュリズムとの違いと共通点、トランプ氏が米軍最高司令官となった場合の危機など多くの論点を語り、質問に答えた。

司会：杉田弘毅 日本記者クラブ企画委員（共同通信）

[YouTube 日本記者クラブチャンネル](#)

©公益社団法人 日本記者クラブ

司会(杉田弘毅) 研究会「変わるアメリカ・変わらないアメリカ」シリーズの第2回です。「反知性主義から見た大統領選挙」ということで、国際基督教大学の森本あんり先生にお話を伺います。

森本先生は、去年の2月に新潮選書から『反知性主義 アメリカが生んだ「熱病」の正体』という本を出されて、各種の書評で取り上げられ、アメリカ研究者の間でも大変話題になりました。この本が日本で話題になったと同時に、ドナルド・トランプという人が勢いを強めて、きょう(3月2日、スーパーチューズデー)はいろんな州の予備選で勝ったということです。

森本先生に50分から1時間ぐらい、皆様のお手元にあるレジュメに沿ってお話しいただいて、その後、質疑応答に移りたいと思います。

それでは、森本先生、どうぞ。

森本あんり ありがとうございます。森本あんりです。

日本記者クラブでお話しするのは二度目になります。前は10年ほど前だったと思いますが、アメリカの政教分離とかサミュエル・ハンチントン、マニフェスト・デスティニーとかそんな話だったと思います。

今回は、アメリカ大統領選挙を反知性主義の伝統から見直すという枠組みでお話をしたいと思います。そうは言っても、記者の方々ですから、選挙戦がどんなふうに展開しているか、もうすでに私よりずっとよくご存じの方々ばかりでいらっしゃると思います。

私に期待されておりますのは、それをもう少し歴史的な背景から、あるいは枠組みの中に落とし込んで、ふだんと少し違った角度から見直すことかなと思ってやってまいりました。

前半は大体歴史の話、後半はいまの話をするつもりで考えてまいりました。授業でも、前半に難しい話をしておいて、後半はわかりやすい話になるというのが一番いいのですが、ちょっとこらえてください。

具体的には反知性主義の伝統のことを話すのですが、反知性主義というのは、こういうふうに何かと一緒にセットになって話を

頼まれることが多いです。

昨年の秋も同じように、反知性主義と大統領選挙について話をしてくれと言われて、あるテレビ局に行きました。そしたら、その直前にフランスのパリでテロが起きまして、ちょっと事情が変わったから3つまとめて話してくれと。フランスのテロと反知性主義とアメリカの大統領選挙。落語の三題噺ではありませんので、私はとてもそんなふうに器用にできませんとお断りをした上で引き受けました。

反知性主義 日本とは使い方が違う

幸い私の本がよく売れておりまして、ことしに入って10刷りになりました。大変ありがたいことですが、もちろん、私はそんな受けを狙って書いたわけではありません。

私は主にアメリカ研究をやっているわけですが、反知性主義という現象は、そういう学問領域の中では昔からよく知られているテーマです。私自身も5年前、シンポジウムでこの話をしておりますし、それから3年前には、それをもとに学者向けの専門書を書きました。

あるとき、それに目をつけた編集者がやってきて、これをもう少し一般向けに書き直してくれと言うわけでした。それで一生懸命書いたのがあの本です。たまたま出版のタイミングが反知性主義の流行とぶつかったというだけの話にすぎません。

ただ、「反知性主義」という言葉は、日本では単に相手を非難するときにつける言葉として使われているようですが、私が書いたことは少し違ってあります。それぞれの使い方があって構わないわけですが、この言葉には特定のアメリカ的な背景がございますので、そのことも知っておくと、言葉の使い道に少し幅が出るのではないかと思います。

トランプ人気の背景 反知性主義の伝統から理解する

皆さん、きょうはスーパーチューズデーでお忙しい一日だと思いますが、ごらんになってい

るとおりです。サンダース候補も見ものですが、何と言ってもトランプさんです。あんな下品な暴言を繰り返す男がどうしてあれほど好かれるのか。アメリカ以外の国ではちょっと考えられないと思います。

年末にアメリカ政治——私は政治の専門では全くありませんけれども、そこに呼ばれて少し話をして、アメリカの現代政治の専門家たちが集まっている議論しましたが、実はその人たちもわかりません。年末ぐらいに寄稿した文章は全部だめになってしまいましたね。いま一生懸命書き直しているところですが、本当に予想外れといいますか、誰もわからない。日本だけではありません。アメリカの専門家も本当のところこれが何を意味しているのか、いまだによくわからないでいるというのが現状だと思います。

アイオワあるいはニューハンプシャーなどではキリスト教の福音派とのあつれきが問題になったという見方もありました。しかし、これも驚くべきことですが、大統領選挙でよく福音派の動きが問題になりますね。福音派もトランプさんが好きなのです。好きはずはなしです。離婚を2回も繰り返して、3回目の奥さんでしょう。中絶は支持するし、「自分の罪について考えたことがありますか」と聞かれて、「いやいや、そんなことは考えたこともありません」と答える。「聖書は好きな本だ」と言うから、記者さんが「では、聖書のどの辺が好きですか」と尋ねると、うーんと頭を抱えてしまって全然答えられない。全くキリスト教的な人間ではありません。それなのに白人の福音派の3人に1人は彼を支持しているという結果が出ている。なぜなのか。後で少しこの謎解きをしたいと思います。

もちろん、彼の人気の背景を分析した議論はある。経済格差の拡大だとか、中国の台頭だとか、移民の流入だとか、あるいはテロの脅威だとか、それぞれに説得力があるわけですが、私は、これは反知性主義の伝統から理解するのが一番わかりやすいと思っています。

知性、エリートはマイナス要因

アメリカの大統領に選ばれるのは、必ずしも知性にあふれた人物ではありません。というよりも、知性がきらりと光る、目から鼻へと抜けるなどというエリートはあまり好まれない。むしろマイナス要因なのです。

そのことをよく示してくれたのがジョージ・W・ブッシュでした。2000年の選挙では、対立候補のアル・ゴア。ハーバード出のいかにも秀才です。でも、結局、人々が選んだのはブッシュだった。頭のいいやつと一緒にいると何か窮屈だ。でも、ブッシュならちょっと間が抜けていて、ビールを片手に座って気楽に話せる相手だというわけです。

「反知性主義」という言葉が最初に脚光を浴びるようになったのは、マッカーシズムの嵐が吹き荒れた1950年代ですが、実はそこでも同じような構図がございました。

一方のステューブソンは、おじいさんが副大統領を務めたこともある名門の出身です。プリンストン大学の卒業生。対するアイゼンハワー、そこに写真を出しておきましたが、ノルマンディー上陸作戦の指揮をとった名将軍ですけれども、知的には凡庸、演説も下手、政治経験はゼロ。そもそも選挙で投票したことがなかった。だから、民主党支持か、共和党支持かわからない。全くの素人。何か聞いたことがありますね。

それでも人々は「I Like Ike」と連呼して彼を支持した。有権者はそういうところに自分と同じ何かがあるということを見て引きつけられるわけです。

ジャクソン対アダムズ 1928年大統領選

しかし、私が時代背景からして一番似ていると思いますのは、もう少し前、19世紀初めのアンドリュー・ジャクソンという大統領です。彼は現在、20ドル札の真ん中に書かれているこの写真、出ておりますので、アメリカでお暮らしになった方々はよくご存じだと思います。20ドル札というのは、アメリカ生活では基本

単位といますか、お買い物などで100ドルでも大体20ドル札でやりますね。ですから、彼の顔が一番よく知られていると言ってもいいでしょう。

もともとこの人は貧しい家の出身。サウスカロライナでしたか。学校もろくに出ていません。後になって彼が大統領候補に出馬するということを聞いた地元の町の人に「あのあほうが大統領になるのだったら、誰でもなれるわい」と言われたくらいにひどい男だったということです。

ジャクソンは、対立候補の陣営から「jackass」と呼ばれました。「ロバ」という意味ですけれども、「間抜け」とか「とんま」とかという意味です。いま、民主党のキャラクターはロバですけれども、それはどうしてかという、ジャクソンが「jackass (ロバ)」と呼ばれたところから出発した伝統です。

では、彼の対立候補はどんな人だったか。ジョン・クインシー・アダムズという人です。名前からおわかりのように、お父さんは第2代大統領のジョン・アダムズです。ブッシュ父・子のように親子で大統領になった親子です。2人とも1期だけでしたけれども。

この人は息子のほうですが、若いころは父親に付き添ってヨーロッパを旅行しているし、本当に知的な人です。ハーバードの教授も務めたことがあると思います。とにかく、生まれも育ちも一流。知性もあり、大統領としての実績もある。本当にいい大統領。しかし、彼が1期目を務めている間に歴史の大舞台が少し回っていくわけです。

それまでのアメリカ、つまり、建国直後の最初の半世紀ほどは、教養ある知的エリート、もちろん、東部の出身ですね。貴族的な、洗練された、いわゆるジェントルマンが政治の実権を握るということが、誰にとっても自然なことだったわけです。ワシントンとかジェファーソンとか、大きな地主で、大金持ちで、身なりも風采も立派なジェントルマン。そういう人たちが政治家になれば、なるほどなと誰もが思っていた。

しかし、その時代がジャクソンで終わりを告

げる。そして、アメリカは西部開拓へと進む、そういう時代になります。

この2人がぶつかった1828年の選挙では、それまで州議会が選んでいた選挙人が一般投票に変わっていくわけです。投票者数が一気に2倍とか4倍とかになります。その一般選挙人を目当てに、大々的なキャンペーンが打たれることになる。演説会があったり、パレードがあったり、バーベキュー大会があって、本当にお祭り騒ぎです。このころからアメリカの政治というのは、ずっとボランティアが担当するものになっています。

残念ながら昨今の選挙ではおなじみになってしまったネガティブキャンペーンも、この選挙から始まります。例えばジャクソンは、つづりを間違えてばかりいる無学で短気な乱暴者としか思われていない。妻のレイチェルは、前の夫との離婚がきちんと終わっていないのにジャクソンと暮らし始めたとか、本当に現代のワイドショー顔負けのゴシップばかり。

ジャクソンの陣営も負けていません。アダムズというのは、税金を使い放題使って浪費して、ヨーロッパでぜいたく三昧してきた。それで、女性好きのロシアの皇帝に若くて美しいアメリカ人女性を差し出したのだとか、本当にワイドショー、大衆が飛びつきそうなゴシップばかり飛び交っている。そういう中傷合戦が始まります。

知的エリートから ワイルドな西部開拓へ変質

結果はジャクソンの地滑り的な大勝利。ワシントンで就任式が行われますが、そのお祝いにはどっと大衆が詰めかけてくるわけです。飲めや歌えの大騒ぎ。ほとんどホワイトハウスはらんち騒ぎで、家具調度壊されてしまいかねないようなことになっているわけです。

お上品な、それまでのインテリ貴族の支配してきたアメリカ、知性あふれるエリートが牛耳ってきたアメリカは、このころからワイルドな西部開拓のアメリカへと変質していきます。おそらくこの時点で、良識ある国民はみんなため

息をついたと思います。いまと全く同じです。一体こんなやつが大統領になって、アメリカはどうなるのだろう。

ジャクソンとトランプは、ネガティブな面でも似ています。ジャクソンが「アメリカ」と言うときには、そこには黒人とか先住民とか女性は含まれていません。彼にとって広がりゆくアメリカ、フロンティアというのは、基本的には白人が所有すべきものですから、先住民はできるだけ遠くへ追っ払っておけ、居留地へ入れておけ、隔離しておけという考えです。強制移住、場合によっては容赦ない殺りくも辞さないという乱暴な態度です。

大統領になったジャクソンは、特権階級化した政治制度を次々にひっくり返していきます。例えば政府の官僚を政権交代ごとにそっくり入れかえる。いわゆる獵官制、スポイルズシステムは、彼が導入したものです。つまり、特定の人々が特権を握り続けることを断固として拒否する。たとえそのために不慣れで、未経験な官僚ばかりになるというマイナスがあっても、それでも権力の独占を防いだほうがいい、常に新しい機会を均等に開いて腐敗を防いだほうがいい、これが彼の考え方です。

こうして聞いてみると、これは現代のトランプが言い続けている反ワシントン、反ウォールストリート、反エスタブリッシュメント、そういうスローガンと実によく似ているということがわかります。

そんな素人集団が大国アメリカの政治の中樞を担うことができるのだろうか。おそらく当時は国民みんながそういうふうに関心したことだと思います。

おもしろいのは、ジャクソンもトランプと同じように大向こうを狙ったパフォーマンスが大得意だったということです。

着任後のエピソードを1つだけご紹介しませうけれども、何とハーバードがジャクソン大統領に名誉学位を授けることになったのです。彼は、もちろん高校も出ていないのですよ。大学も出ていませんよ。だけど、名誉博士号をもらってしまうわけですね。彼はうれしかったのか、迷惑だったのかわかりません。

ともかく彼は知性の牙城と言われるハーバード大学へのこのこと出かけていくわけです。当時のことですから、授与式はラテン語で行われる。もしかすると、そこに集まった人々は、この無学な男が知的な大舞台でまごつくのを意地悪な気持ちで待っていたのではないかと思うのです。ところが、彼はそこで悠々と立ち上がって、自分でも堂々とラテン語の答礼をします。もちろん、彼らはラテン語など全然知りません。彼が後で回想したところによると、それはそこに書いてありますような演説だったと言うのです。

「Caveat emptor: corpus delicti: ex post facto」何とかかんとか。日本語に訳しますと、「買い手危険の原則」とか、「犯罪証拠物」だとか、「多くのものから一を」だとか、「大熊座」だとか、最後は「安らかに眠れ」などなど。これは全部でたらめです。身の回りで目につくラテン語の言葉があちこちにあるでしょう。それを全部集めてきて、最後に「安らかに眠れ (requiescat in pace)」と言うと、何となくうーんとみんなが納得する。

人々がこれを真に受けたかどうかはわかりません。でも、彼は持ち前の機転といえますか、度胸でこの大舞台を切り抜けていく。アメリカ人はこういうのが大好きですね。インテリの鼻を明かすという、ここにしびれるのです。

うわさを聞いた民衆は本当に大喜びで彼に喝采を贈りました。こういうところに、素朴だけれども活力に満ちたアメリカの原動力をみるように思います。

トランプに似たジャクソン

では、大統領としてのジャクソンの実績はどうだったか。トランプ候補の今後を顧みるには、このこともおさらいしていたほうがいいように思います。

実はこれが決して侮れない。連邦政府の重要な骨格を形成したのは、実はこのジャクソンです。確かにそれまでの運営の仕方とは大きく違う。だが、時代がそれを要求していたと言えるかもしれない。もはや各州の利益代表が集まる

調整の政治ではなくて、連邦政府が強くならなければ対外的にもやっていけない時代でした。大統領はアメリカ人民の直接の代表である。だから、議会をもしのぐ権力を持っているのだ、ということを示したのは彼です。

サウスカロライナが南北戦争の前に離脱論をぶち上げるのですけれども、そのときにはそれを押さえ込んで連邦を維持します。さらには第二銀行の設立を葬り、財政規律を守り、外交でもフランスやメキシコとの戦争を回避する、そういう知恵すらみせる。なかなかすごいですね。

もちろん、いまそう言ったからといって、私は、トランプもそうなるだろうと言っているわけでは全くありません。歴史は同じように繰り返すわけではないし、パターンが似ているとしても、結末も同じとは限らない。

ジャクソンの舞台は形成期のアメリカでした。トランプの舞台は、むしろ爛熟期あるいは下降期のアメリカです。それでもアメリカには時々こうしたドラスティックな変化を起こす人物があらわれる。そして、それまでの枠組みをぶち壊して新しい環境をつくってくれる人がいるものですね。

反知性主義は、その本領を発揮するときには、こういう現状に対する揺さぶりが強いです。レジュメにビリー・サンデーのことを挙げておきました。私の本の表紙に写真を出してある人物ですが、この人は、19世紀末から20世紀の初めに生きたキリスト教の大衆伝道者です。といっても、彼は別に学校教育を受けたわけではないし、聖書や神学を学んだこともない。説教になると、壇の上を走り回るのでよ。椅子を振り回して、ともかく型破り。上品な人にはもちろんひんしゆくを買うけれども、一般大衆は大喜び。まさに反知性主義のヒーローです。

その彼をモデルにして映画ができていますが、その中で彼はこんなことを言うわけです。「Harvardism, Yalism, Princetonism」。せりふですから、全体を引用してみますと、こんなふうですね。「そうさ、あんたは5ドルもする百科事典で、俺は2セントのタブロイド紙だ。お高くとまった連中にはそういうのが好みかも

しれん。だが、ハーバード主義、イエール主義、プリンストン主義にはもううんざりだ。俺は神学も生物学も知らないし、学問なんか何も知らない。だがな、大衆は誰も百科事典なんか買わない。タブロイド紙を喜んで買うんだよ。俺がその大衆だ」。実に自信たっぷりの戦闘的な言葉ですね。

知性と権力との固定的な結びつきに対する反発 反知性主義

微妙な違いですけれども、ちょっと気をつけていただきたいのは、彼は別にハーバードやイエール、プリンストンという大学そのものに反感を持っているわけではありません。それらがハーバード主義になったとき、つまり、その大学の卒業生がいつも政府や企業の中心的な地位について、知性があるところに固定してしまったとき、ハーバード「主義」になったとき、それに対して反旗を翻しているわけです。

したがって、反知性主義は、本来的な意味においては単なる知性への反発ではない。そういう要素もありますけれども、もう少し明確なのは、知性と権力との固定的な結びつきに対する反発です。トランプさん、サンダースさん、彼らの発言が一貫して現在の政治や経済の中枢にいる主流派に対するアンチテーゼであると全く同じです。

もともと知性は権力と結びつきやすい性質を持っている。そして、一旦結びつくと、それは自己を再生産するようになる。つまり、知性は固定化する。固定化すると墮落する。いわゆるピケティ問題です。金持ちは金持ちを再生産する。上流階級はよい教育を受けて、子どももよい学校に入る。だから、またいい仕事について、いい金が入る。逆にそうでない者は、いつまでもそういうチャンスがなくて、いつまでも浮かび上がれない。こういう階級の固定化に腹を立てているのがいまのアメリカです。反知性主義は、こういう意味では、格差是正をするベクトルとして働くこともある。

自分の能力と才覚でのしあがるセルフ・メイド・マンに価値がある

トランプさんをみて日本人がわからないことの一つに、「セルフ・メイド・マン」という価値があると思います。アメリカ人というのは自分の力での上昇してきた人を好む。世襲の金だとかコネだとかによらず、裸一貫で出発して、自分の能力と才覚でのし上がっていく。それが唯一正しいの上がり方なのです。だからみんなアメリカンドリームになるわけです。みんなゼロから出発しなければいけない。親からもらったお金でなくて、ゼロからみんな出発して平等にいくわけですから。

日本ですと、こういう成り上がり者だとか、にわか成金にはあまりいいイメージを持っていませんね。何となく冷たい目でみる風習がある。そこは大きく違うと思います。

アメリカでは、そういう人が自分で稼いだ金を使って、自分で自由に発言する。これは正しいことです。美德です。だから、トランプさんはあれほど人気がある。まあ、実際にはトランプさんはほかの人に比べるとあまりお金を使っていないのですけれども。

三つのなぞを解くのは キリスト教のアメリカ化

さて、後半です。もう少し現在の話をしたいと思います。私は現代アメリカ政治の専門家ではありませんので、今日は他のところでは聞けないお話、何かお値打ちのお話をしておかないといけないなと思っております。

それは、3つの不思議についてです。もちろん、この3つ以外にもいろいろ不思議なことがあるのですけれども、今日はこれだけです。そこに書いてありますA、B、Cの3つです。A、B、C、3つの謎には、3つともある共通の論理が働いている。3つの「なぜ」を解く共通の論理とは、キリスト教のアメリカ化、神学や宗教学でいわゆる「土着化」の問題です。

皆さんの中にはそういう方はいらっしゃらないと思いますが、アメリカというのはキリス

ト教の本場だろう、だから、あのキリスト教がキリスト教の本来的な姿だろうなどと思っていらっしゃる方は、もうおられないと思います。もちろん、それはとんでもない誤解です。こういうことは神学を勉強しないとわからないですね。

キリスト教というのは、アメリカに渡ってきた宗教です。そこで根をおろしましたが、根をおろせばおろすほど、つまり、土着化すればするほど、その焦点といいますか、性格が変わってきます。それは仏教でも同じです。日本の仏教は、ほかのアジア諸国の仏教に比べて非常に特殊ですね。皆さんよくご存じのとおりです。それはなぜかといえば、仏教が日本に受け入れられ、日本に土着化して日本的な仏教になったからです。

アメリカに渡ったキリスト教も非常によく土着化して、その結果、キリスト教自身も変質していきました。私は、自分の本の中でそれをウイルス感染に例えて説明をしたのです。そして、キリスト教徒の人たちから「何でキリスト教がウイルスなんだ」と叱られてしまいました。あまり悪気のあることを言ったつもりはないのですが、そういうふうに取り上げられました。

ともかくウイルスというのは、感染して体の中で増殖していきますと、感染した体、宿主に大変な変化を及ぼします。熱が出たり、せきが出たり、大変です。だが同時に、自分自身も体内で増殖した後、変化していくわけです。亜種が生まれる。

成功したのは神が祝福したからだ

戦後すぐのアメリカにノーマン・ヴィンセント・ピールという人がおります。この人はメソジスト教会の牧師です。彼は、『積極的思考の力』という非常に楽天的な本を書きました。簡単に言うと、資本主義の世界を謳歌したという感じの、ポジティブに物事を考えましょうという、実にアメリカ的な本です。原著が1952年ですか、この間ウェブでみたら、もう半世紀以上たっている本なのに、21世紀になっても、日本語の翻訳が2種類ぐらい新しく出ていま

す。お読みになったらおもしろいと思います。
今日でも同じです。それがアメリカ的なキリスト教の特色の一つ。ピールの『積極的思考の力』もそうだし、先ほどのビリー・サンデーもそうだし、あるいはレーガン大統領もそうです。そして、今日のトランプ候補。みんな同じです。

何が同じか。みんな同じアメリカ的なキリスト教の伝道者です。何を伝道しているのか。それは「富と成功」という福音です。要するに、彼らの論理をたどってみると、こんな感じです。「俺を見ろ。俺は成功した。ゼロから出発してこんなに金持ちになった」。——トランプさんは別にゼロから出発したわけではありませんし、大学も一応出ていますけれども、それは置いておきましょう。

とにかく「俺はこんな金持ちになった。なぜかといえば、それは人々が自分を認めてくれていてだけでなく、神が自分を祝福してくれているからだ。神が認めてくれているのでなければここまで成功することはあり得ない。神は、従う者には祝福をくれるし、背く者には罰を与える。ところで、自分は成功している。ゆえに、自分は神の祝福を得ているのだ。自分は神の目からみても正しいのだ」。

わかりやすいですね。そこに三段論法のような形にお示ししておきました。私は哲学が専門ですので、よく学生たちに言いますけれども、これは厳密な意味で論理的に言うと三段論法の体裁にはなっていません。まあ、それはいいでしょう。とにかくこんな形だというふうにご理解ください。これが彼らを支える根本的な確信、自信というか、自分を奮い立たせるもとになっている。

福音派がなぜトランプを支持するか

ニュースをみていて、福音派の人々が、あれだけキリスト教と無縁なトランプをなぜ支持するのか。これが「なぜ」の最初のAです。不思議に思われるでしょう。そのなぞは、このアメリカ的なキリスト教の論理がわからないと解けません。

要するに、アメリカの場合は、キリスト教が

世俗化して、この世向きになって、内向きになっている。自己礼賛的な論理にすりかわっている。キリスト教にはもともとこういう此岸的なところがあります。本当に「この世」的なところもいっぱいあります。だが、同時に、他方で非常に彼岸的なところ、超越的なところもあります。だって、それはそうですね、普遍的な主張をするわけだから、国家を超越するところ——現世批判的なところ、アメリカ自身を裁きのもとに置く力もあります。過去にもありました。

しかし、アメリカのキリスト教は、そういう現世批判的な部分を次々にそぎ落としていって、徹底的に楽観的で、自己肯定的で、本当に自己慶賀的、お祝いする宗教に変質してしまっている。

日本の見方ですと、この世的に成功している人間というのは、どうも怪しい、うさんくさい。あいつ、悪いことをして金もうけをしたのではないか、というやっかみ半分の気持ち、眼差しがどこかにある。

しかし、アメリカの論理は、極端に“vox populi, vox dei”です。人の声は神の声。どこかの新聞のコラムではありませんが、天声は人語として与えられる。

われわれは神の声を直接聞くわけにはいかないので、それを人間の言葉として聞く。で、その人間の言葉は何と言っているか。こう言っているわけです。「あなたは成功者だ」。その人にとっては、私のところには巨万の金が転がり込んできている。人々は私をこんなに応援してくれている。それは神もまた自分を是認してくれているからに違いない。そうでなければ、そんなことをできない。だから、自分のやっていることは、そう間違っていないだろう。これだけ応援してもらっている人がいるのだから。人の声を通して、大観衆の叫びを通して、彼らは神の是認を聞いているわけです。

ほかの人も同じようにみます。トランプというのは、確かにこの世で成功している。外から見ると、ちょっと変なところがある。それはわかる。でも、きっと神様は違うところをみているに違いない。トランプさんの心の清々しいところがどこかにあるに違いない。わたしにはあ

まりみえませんが、そこを神様はみているのだ。だから、彼はあんなふうになっているのだ。

テレビ伝道の大物ジェリー・ファルエルは、トランプを事もあろうにキング牧師とかイエスに例えて褒めそやしています。いやあ、すごいですね。

福音派としては、共和党の票田としてこれまでも常に大統領選挙の一翼を担がされてきたわけですね。いつもそのたびに心にもないリップサービスを受けている。そして裏切られている。トランプは、確かに下品で乱暴かしらん。結構ひどいそをつくかしらん。だが、少なくとも彼は、心の内にあることと口から出てくる言葉とが甚だしく違っているということはない。それが実は政治家としてはまずいわけですけれども、福音派としては、彼こそ「正直な人間だ」ということになるわけです。

なぜあれほどの不満がたまるのか

そして、B。この同じ論理がどうしてアメリカがいま、あれほど怒っているのかを理解する鍵にもなる。サンダース候補を支持している若者たちがどうしてあれほど強いフラストレーションを抱えているのか。政治や経済の専門家ももちろんいろいろ説明してくれます。先ほど言ったみたいに、格差だとか、外国の脅威だとか、移民だとか、テロだとか。それはみんな正しいと思います。だが、それだけでは若者たちにどうしてあれほどの不満がたまっているのかを説明できない。説得力がない。彼らの心の中で働いている論理、なぜ彼らが納得できないのか、その行き場のない怒りが説明できなければ困るのです。

先ほどの三段論法のところをもう一度見直していただきたい。もしこの小前提が逆だったらどうなりますか。「ところで自分は失敗している。」とすれば、結論は、「神もまた自分を是認してくれていない」ということになるでしょう。

もちろん、そんなことは受け入れられない。だって、自分は真っ当に暮らしているのだし、

まあ、人並みに働いているのだし、普通の暮らしをしてきた。生まれてから一度も悪いことをしたことがないとは言いませんよ。だけでも、人並みに普通の真っ当な暮らしをしてきたわけです。それなのに食えない。うまくいっていない。成功しない。同じように、アメリカ国家も衰退している。なぜかわからんが脅かされている。下向きになっている。

こういう理解のできない不条理こそが問題なのです。実はそれは、この三段論法の論理があくまでも勝ち組の論理だからです。この論理では「負け」は説明できない。

アメリカは負けるという経験をしたことが実はないのです。「いやいや、ベトナム戦争、負けたでしょう」、われわれだったら言いますね。でも、若者たちに聞いてみてください。「えっ、ベトナム戦争、あつたっけ。あれ、勝ったんじゃないの」と思っています。あの時代を知っているわれわれにとっては、あれは確かにアメリカの威信が傷ついた時代でしたね。だけど、そんな傷は、この若者たちにとっては、高度成長の波の中でもうとっくにどこかへ消え去ってしまっている。

だから、アメリカは、どうしていま自分たちが負けているのか理解できないのですよ。理解できないというよりも、納得ができない。負けるということを神学的に説明する論理が、アメリカのキリスト教の中には欠落しているからです。

実は宗教こそその論理を提供するはずのものなのです。イエスの言葉で言えば、「私の国はこの世のものではない」とか、「あなた方はこの世では悩みがあるけれども、私はすでにこの世に勝っている。だから安心なさい」とか、そういうふうに進むのが、キリスト教に限らず、宗教の論理なはずですが、アメリカのキリスト教にはそれが非常に希薄です。あまりに現世的だから。

なぜ選挙はあれほど熱いのか

急ぎましょう。第3に、こういうアメリカの大統領選挙をみておきますと、アメリカではつ

くづくこういう選挙に人々が熱狂しているのがわかりますね。——そのとばかりでいま日本でもこんなふうに大議論をしているわけですから。一体何であんなに熱いのだろう。長い選挙戦ですね。普通ならくたびれてしまいます。巨大なスタジアムを借り切って、赤白青の風船をバースと飛ばす、党大会、討論会の熱狂ぶり。とてもとても日本の政治風土では想像もつかない熱さ。こういうことは、政治学を学ぶだけでは理解できません。

実はあれはみんなキリスト教の伝道集会そのままの姿です。大衆伝道が用いてきた手法が全てそっくりそのまま使われている。なぜかといえば、やることが同じだからです。そこには、どうやって人々にアピールして、どうやって多くの人々の心をつかむか、投票してもらおうかという大衆動員のノウハウがいっぱい詰まっているのです。

選挙運動は

キリスト教のリバイバル集会と同じ

だから、アメリカの選挙戦はいつでもボランティアなのです。集会への勧誘、議論の方法、みんなキリスト教のリバイバルの集会と同じです。党員集会ではカードを配ります。「私はクリントンを必ず支持します」などというカードに名前を書いてもらう。どこかの解説者がテレビであのカードの説明をしていましたけれども、あれは別にクリントンが始めたわけでもない、オバマが始めたわけでもない、ずっと昔からある伝道集会の古典的な手法です。「決心者カード」と言うのです。ビジネスもまた同じです。どちらもやることは同じ。売るのが神様か、商品かという違いだけです。

販売の方法も、ただ店を開いて安閑と待っているのではなくて、家から家へと渡り歩く巡回セールスです。あれも18世紀に始まった巡回伝道というスタイルをそのまま取り入れたものです。

われわれが外からみて不思議に思うこと、例えば健康保険あるいは銃規制に対する反対、同性愛、進化論に対する反対、みんな同じ根っこ

を持っています。それは権力に対する宗教的な疑念です。アメリカの文化には、そういうものに対する疑念がもともと組み込まれている。それはアメリカにキリスト教徒が何%いるとか、教会に出席する人が何人いるか、そういう次元の問題ではないのです。アメリカの政治のシステムがそもそも神学的なのです。

軒を貸して母屋を取られる 政党政治の危機

最後に、今回の大統領選挙、ここまでで明らかになったことは何か。私は、政党政治の危機だと思います。トランプ氏もサンダース氏も、本来の意味では自分の政党を代表していない。よくご存じのとおりです。共和党も民主党もいわば「軒を貸して母屋を取られる」という状態です。これは共和党とか民主党とか、それぞれ単独の問題であるというよりも、そもそもアメリカ政治を長年にわたって規定してきた二大政党制そのものに揺らぎがみえている、制度疲労ないしほころびがみえている、ということではないかと思います。ここは政治の専門家に伺いたいと思いますけれども。

日本ではどうか。全然関係ないか。数のうえからは自民党の一極集中にみえますが、それはなぜかといえば、いつまでたっても野党の再編ができないからです。そして、それは与党だとか、野党だとか、どの政党だとかということではなくて、そもそも政党政治というこれまでのあり方を国民が信用しなくなっているからでしょう。野党が2つ合流するぐらいでは新しい支持者はふえないと思う。

そのかわりにふえているのは、SEALDsだとかの、いわゆる草の根民主主義。素人の、アマチュアのデモ参加。彼らは既成の政党には初めから失望しています。だから、日本でもアメリカでも、私には状況は同じようにみえる。

多数決だけで決まらない正統性

神学や宗教学の観点からしますと、これは正統の形成の問題です。正統（オーソドキシシー）

の問題です。正統というものには、おのずからなる権威があります。それは単に数の問題ではない。民主主義というのは、選挙による多数決で物事が進んでいきますので、いつでも容易にポピュリズムに乗っ取られる可能性がある。

けれども、投票で数を稼ぐ、あるいは集団的な熱狂で多数を獲得する、それはあくまでも手続き的な正統性です。政治の世界では、特に近代以降、こういうデュープロセスが大事になってきた。それはわかる。だが、本来の意味での正統性というのは手続きだけでは生まれないのです。実はそれは誰もが知っている事実である。

例えば憲法改正問題です。明らかに手続き的な正統性だけではない、もっと本来的な、何か理念的な正統性がなければならぬ、ということは誰でも知っている。それは政治や多数決だけでは決まらない、人々の心の中の「納得感」というのかな、そういうものがかかっていると私は思います。

トランプさんがよく言う「Make America Great Again」ですが、アメリカが「great」偉大なのは、経済的に成功しているからではないのですよ。アメリカが偉大なのは、それまで掲げてきた理念の問題です。自由だとか、平等だとか、正義だとか。彼はそういうことにあまり興味がない。今後の日米関係がどういうふうになるか、そういうことも大事だと思いますけれども、私はこちらのほうがより深刻に感じます。

なお、このあたりをもう少し詳しく書いたものが3月に出ますので、そこに書いておきました。ご興味があればお読みいただければ幸いです。（「権威の蝕——正統の復権は可能か」小説トリッパー—2016年春号、朝日新聞出版）

きょうはありがとうございました。（拍手）

《 質 疑 応 答 》

司会 森本先生、ありがとうございました。日本にも随分トランプファンがふえたのではないかと思うぐらい説得力のあるお話で、トランプがなぜこれだけ強いのかというのがよくわかりました。それでは、できるだけたくさん

質問を受けたいと思います。

質問 大変おもしろい話、ありがとうございました。特に正統性のお話は多分質問が出るとお思いますので、私は横道といいますが、サイドのことを伺いたと思います。

そもそも格差ということを考えれば、平等感あるいは平等の日米の違いや超越性から来る平等とか、アメリカにおける平等がそもそもどういうことで、いま、サンダースとかトランプがあるのかということにもお話を広げていただければ、と思います。

平等 ドライビングフォースの理念

森本 何と答えたらいいでしょうね。いろんなところから答えられると思いますけれども、いま申しました平等とか自由というのは、ある神学者の言葉を使うと、「イデ・フォルス」と言うのですね。「イデ・フォルス」というのは、フォースというか、力を持った理念という意味、物事に駆動力を与える理念といいますが、きらきらした、例えば「民主主義」もそうですけれども、「平等」というのは、まさにその一つです。

いかにも容易に裏切られる理念の一つですね。アメリカはそもそも平等を掲げてイギリスから独立したわけで、独立宣言の中にも「全ての人は平等につくられた」という超越的な話を書いてある。なるほどと思えばいいのですが、リアリティーはちっとも平等ではなかったわけで、人種により、性別により、あるいは性的な指向により不平等が続いてきた。

そういうリアリティーもありますけれども、アメリカというのは、なおそれを少しずつ前へ進めるためのドライビングフォースとしての理念があるわけです。だから、現実と違うのは当たり前です。でも、それを少しずつ変えていく力として平等があるので、サンダース候補の支持者たちが平等という理念を掲げ直しているというのは、アメリカ的な伝統の中に正しく位置づけられている動きだろうと思います。

ついでに申しますと、キリスト教の伝統の中でも「平等」という言葉をよく使いますけれど

も、実にトリッキーでして、長いことキリスト教というのは、「神の前では平等だ」と言い続けてきたのです。「キリストにあっては平等だ」と。だけど、社会的には金持ちと貧乏人がいる、権威がある者とない者がいる。そういうことを平気でずっと言い続けてきた。宗教的な平等感が実社会の平等へとできる限り反映されないように努力を続けてきた、とさえ言ってもいい歴史がありますね。だが、やがてそれも覆されていくということでしょうか。

質問 きょうの本筋と外れてしまうかもしれないのですが、ヨーロッパではいま、極右勢力が欧州統合という理念に対するアンチテーゼを掲げていて、先生がおっしゃった反知性主義、あるいは「ポピュリズム」という言葉も使われますが、相通するような気がします。ヨーロッパの極右の台頭といわゆるアメリカのトランプさんの動きなどに何か相通するものがあるのでしょうか。

もう一つは、「ポピュリズム」とわれわれが呼んでいるものと反知性主義は違うものなのか、お聞きます。

反知性主義の強さはアメリカ独特 ヨーロッパは異なる

森本 この質問をよく聞かれるのですが、ヨーロッパには反知性主義的な風潮が同じようにあるのか。とても難しい。よくヨーロッパのことを知らないとお答えできないのですが、私には非常に希薄にみえる。反知性主義の圧力の強さでは、アメリカは独特です。なぜならば、土台、素地がそもそもヨーロッパとアメリカでは大きく異なっているからです。極端な形での、みかけ上の平等社会、そして極端な仕方での知性主義の支配というのが前提としてあったうえで、反知性主義があらわれます。ヨーロッパ的には別のスタイルで社会の中に階級が厳として存在していて、その中でルペンだとかそういう極右政党の進展がみられます。でも、それは寛容と不寛容の問題の中で、ちょっと違う枠組みで存在しているのではないかと思います。

だから、ヨーロッパ的な極右の人々がトランプのような仕方でスイープする（広まる）ことは、僕には考えられないと思います。

司会 いまの質問で補足します。つまり、アメリカにおける反知性主義というのは、必ずしも知性そのものに対して反対することではなく、知性と権威が結びついたところに対しての、反権威主義であるという理解でよいのかなと思うのですけれども。

森本 はい。

司会 いま質問に出た欧州との土壌の違いということになると、欧州は、権威なり階級そのものがまだあって、それに対し挑戦する動きが明確に位置づけられるということなんですか。

森本 私もそんなにはっきり申しあげられるわけではないのですが、欧州の場合は、——欧州と言ったって、一言ではとても一緒くたにできませんが——基本的にはもう少しはっきりした階級の区別、クラスソサエティーが歴史的にも長くあったので、その中では反知性主義があまり必要ない、ということでしょうか。育たないというよりも、そうでないチャンネルを通して十分発言できる素地ができていたと言ったらいいかと思います。

権威、パワーのチェック・批判が 可能な世界

質問 レジュメに「キリスト教と無縁なのに福音派に好まれる」とあります。キリスト教の中にもいろんな宗派があると思うんですが、ことさら福音派に好まれる理由があるのでしょうか。2つ目は、グローバルな共通性もあるのではないかということです。ヨーロッパの右派ポピュリズムと言われる運動の中には反ユーロもあるし、反移民、反イスラムもあるわけですが、特徴的なのは、反エリート主義があります。反ユーロ官僚、あるいはEUというシステムそのものに対する異議申し立てがいま起きている。アメリカ、ヨーロッパや日本、それぞれの特殊性はあるんですが、通底する何かがあって、反エリート主義あるいは反権威主義が起

きているという感じもしますが、いかがでしょうか。

森本 ありがとうございます。2つ目のほうは、おっしゃるとおりだと僕にも思えます。実は、急いでいて飛ばしましたが、レジュメの2ページ目にナイムの『権力の終焉』という本を挙げておきました。私にとっては、すごく大きな衝撃を受けた本ですが、このナイムの理解というのは、いまお話しになったとおり、そういう反権威とかエスタブリッシュメントに対する反発が全世界的に、そして全分野的にも起きているという主張です。

それはなぜかという、ここに書きましたけれども、市場の圧力だとか、市民の監視、メディアの精査、こういうものがどこでも当然として要求されるようになったからです。アメリカ、ヨーロッパ、日本に限らず、大企業の説明責任というのはどこでもそうです。そういう意味では、権威に対するチェックが市民の誰でもできるようになった。インターネットで手に入れることのできる能力や情報というのは大きいですね。

ウィキリークスまで行かなくても、パワーをチェックする、あるいは批判することが可能な世界ですので、それはアメリカであろうと、ヨーロッパであろうと変わらないのだろうと私も賛成いたします。

さて、最初のほうのご質問ですが、では、福音派と違うメインライン、主流派はアメリカではどういうふうに反応するのか。メインラインというのは、政治的にもはっきりこちらというふうに大きくまとまりとして動くわけではありませんので、大統領選挙の中で主流派がどちらを支持するかということについて論じられることはないんです。

福音派の場合は、かなりはっきりそれが分かりますから、例えばティーパーティーとか、テッド・クルーズがどっちになるかとか、そういうことについてはマスで動きますので、よく論じられます。では、主流派のプロテスタントはどっちに動くか。それは全くそれぞれですね。

それから、カトリックもそうです。カトリックも、最近ユダヤ系も含めてですけども、

カトリックとプロテスタントという分け方でなくて、カトリックの中の福音派——「カトリックの中の福音派」というのは言葉の矛盾ですが、保守派とリベラルと言ったらいいのでしょうか、それとプロテスタント側の保守派とリベラルは、実は案外横に仲がいいんですよ。政治的な動きとしては、宗派を越えた連携が大きいということが言えますね。

アメリカのキリスト教を知る—— アメリカの根っこをつかむこと

質問 1つは、覚醒の問題とか、リバイバルの歴史の問題です。いま、アメリカ人にとって、どれぐらい「覚醒」というコンセプトが広く認識されているのか、というところをお尋ねします。というのは、いま日本でも映画館で上映されている「スター・ウォーズ」、今回は「フォースの覚醒 (Force Awakens)」といます。

森本 それは「リバイバル」という言葉ですか。フォースの……

質問 「フォースの覚醒」。

森本 英語の原題は？

質問 「Force Awakens」になっています。

森本 「Awakening」ですか。

質問 しかも、最近のイラクやシリアの情勢をみますと、例えばイラクの中のスンニ派部族のうち、アメリカ軍に協力的な人たちに対して、アメリカ軍は「スンニ派覚醒グループ」と呼んでいる。アメリカ軍にとって、スンニ派覚醒グループをいかに援助していくかということが、対イスラム国に対する作戦上重要だと言われています。アメリカ側は、彼らを「スンニ派覚醒グループ」と名づけて、実はそうしたアメリカ的キリスト教の概念を中東に当てはめようとしているようにもみえます。「覚醒」というコンセプトの広がりを先生はどうみていらっしゃるか。

もう一つは、先生の『反知性主義』には、ウイルスの例えが出てきたり、アメリカの福音派の流れについて、クリティカルに分析している。ただ、先生ご自身はICUで教え、牧師の立場でもあると思うんですけども、アメリカの福音

派と先生ご自身の宗教観の距離感はどうなっているのかなど、一読者として関心を持ちました。

森本 「スター・ウォーズ」の新しいのをまだみていないのでよくわからないんですけど、「Awakening」という言葉が使われているとしますと、明らかにこのテンションは、アメリカなどではよくわかると思います。

30年ぐらい前かな、「Awakenings」というタイトルの映画がありました。ロビン・ウィリアムズが登場し、ドーパミンという薬の発見で、ほとんど寝てばかりのアルツハイマーみたいな人たちがだんだん覚醒していく。結局は元の木阿弥でだめになってしまうんですけども、そういう映画です。日本語の題は「レナードの朝」なんですが、原題は「Awakenings」なんです。「Awakening」と言った途端に、アメリカ人は、それがリバイバルの内容だということを感じると思います。ですから、「Awakening」というタイトルをつけたときには、おそらくリバイバルのことを考えさせるためにつくられていると僕には思えますね。もちろん、アメリカの中でも全然知りませんという人もいるかもしれません。

2つ目の質問は、どういうふうにご答えたいかわかりませんが、この本を書いて、いろいろ言われたんですが、そんなに批判的ですかね。僕はそういうふうには思わなかったんですけども。でも、みるところをみておかなければ、「ひいきの引き倒し」になっても進まないし、そのぐらいは当然理解しておかなければ……。敵も理解しないとわからないでしょうし、アメリカを批判するにはアメリカのキリスト教のあり方を知る。アメリカのハート、根っこをつかむのに非常に大事なことだと思いますので、神学的な批判はアメリカ批判の一番の肝だというふうに僕には思えます。

アイゼンハワーは模範的な反知性主義

質問 個人会員のカワキタです。

最初に、反知性主義の例として、ジャクソン対クインシー・アダムズの例を出されました。

これは極めてわかりやすい例ですけども、もう一つおっしゃったのはスティーブンソン対アイゼンハワーで、これはよく言われていますが、私にとってかなり意外なんです。

確かにスティーブンソンは上流階級の出身で、弁護士だった。ただ、アイゼンハワーも、庶民階級の出身ではあるけれども、ウェスト・ポイントに入ったわけですし、成績はあまりぱっとしなかったけれども、軍歴も後半はあれだけの成果を……

森本 いや、もちろん、ばかでは将軍はできませんよね。

質問 ですから、一般的な米国民からみれば、アイゼンハワーも相当なエリートのはずです。士官学校を出て、陸軍参謀総長までやっているわけですから。これが反知性の代表だと言われているのが、意外なんです。その辺をもう一度説明していただけますか。

森本 反知性主義の伝統の基本的な流れとしては、アイゼンハワーの例は典型的な反知性主義に数えられます。もちろん、知性が低ければ、大統領になってからも、すぐれた大統領にはなれませんね。オン・ザ・ジョブ・トレーニングでなったのだと思います。

だけど、出発点では、彼は政治的にはいまのトランプみたいなもので、アフィリエーションも共和党だったかどうかわからない。そもそも投票なんかしたことがないんですから。要するに、われわれの時代の言葉で言うと、「ノンポリ」だったんです。そういう意味では、あまり政治家に向いている人間とは思われていなかったのではないのでしょうか。

反知性主義の旗手としての橋下氏

司会 格差や不正、腐敗を何とかしようという動きは、アメリカでは定期的にあるという気がします。そのたびに二大政党の枠組みの中である程度そういう不満を吸収して、改革運動が進んできている。今回のトランプなりサンダースが代表している不満あるいは怒りを既成の二大政党が吸収して、また新しいアメリカに変わっていく兆しが、何かみてとれるところは

ありますか。あるいは今回は極めて革命的な反知性主義がアメリカを覆っているということでしょうか。

森本 どうでしょうね。わかりませんが、例えばクリントンの言説などでも大分トランプ、サンダースに引っ張られて、かつての自分のスタンスが少しずつ揺らぎますね。TPPなどにしても。そういうところからみると、既存のあり方に大きなくさびを打ち込んだ。どちらに転ぶかわかりませんが、最後に収まるところへ収まったとしても、前のような当然の前提としてそれを想定してかかるような時代にはもう戻れないだろうと思います。

なぜかという、コンスティテューションが変わらないからです。橋下さんがいい例ですけども、本当に彼は反知性主義の旗手ですね。権威のある者を全部やっつけておいて、自分が上がっていくわけです。ある程度の地位に達すると、今度は自分がその反知性主義の攻撃を受ける側に回りますから、同じ論理ではやっていけないんですけれども。ともかく、彼の大阪都構想はうまくいかなかったかもしれない。彼は変わりました。だけど、彼を支えていたコンスティテューションはそのまま残っているわけです。そういう意味では、彼は大きく揺さぶりをかけて日本の政治に何か新しいものをもたらそうとした。確かに失敗しましたが、やっぱり彼のインパクトは残るわけです。変化へのモメンタムは続くわけです。

そういう形で、単に橋下さんが成功したか失敗したかという次元でない仕方での変化は確実に起こるだろうなと思います。アメリカでもトランプ現象はそういうインパクトを残すだろうなと思います。

トランプ「大統領」 権力内部が分裂する危険

質問 反知性主義に関して、ジョージ・W・ブッシュを挙げておられました。ジョージ・W・ブッシュは、私の記憶では、当時の閣僚の8割方がメソジスト派で、コリン・パウエルを除いて、プレスビテリアンとか、完全な福音派

の政権であったと思います。仮にヒラリー・クリントンとトランプが本選を戦い、もしトランプが勝って大統領になったときには、ブッシュのような福音派の閣僚で政権を固めていくのか。それとも想定し得ないようなアウトサイダー的なホワイトハウスが生まれるのか、その辺はあまり想像したくないかもしれませんが、いかにいかなもののでしょうか。

森本 私はそういうところの専門家ではありませんので、私的な推測を申しあげるにすぎませんが、その想像したくないことが起きた場合、その周りまで全く新しいものを引き連れてきていま変える、という時代ではないと思います。ジャクソンの時代ではそれが可能だったかもしれない。まだ萌芽期というか、形成期でしたから。しかし、いま、アメリカにそんなことをやるような余裕はない。

例えば核ボタンのブリーフケースがどうなるか、そういうことについての当然の憂慮もありますし、もう少し深刻なところで言えば、権力構造内部でいわば分裂が起きる。つまり、そういうところには強固な既存のシステムがございしますので、そういうものと新しいコマンドー・イン・チーフが潜在的に衝突する可能性はある。

これはナチスの話と同じです。ナチス・ドイツは、われわれからすると、ヒトラーはドイツ軍のリーダーみたいに思われることがありますが、ドイツの国防軍は、ヒトラーと全く反対なんです。なぜかという、国防軍がとんでもないエリートででき上がっているからです。ドイツのエスタブリッシュメントの塊だったんです。したがって、ヒトラーが来たときは、実はそれと全然違うんです。

そういう確執が権力内部で起きる。それは国家としては非常に危険なことです。つまり、コマンドー・イン・チーフのコマンドが軍隊に伝わらない。軍隊がそれにもしかしたらノーと言うかもしれない。実際にそういうことを言いかけている人もいます。こういうのは、私にとっては、政治の制度よりもっともっと深刻な危険を意味していると思いますね。シベリアンコントロールの瓦解とかいろいろなことが出てきま

す。アメリカは、今そういう実験をするにはあまりに危険な国だと思います。

ですから、想像したくない事態が起きて政権が変わったときには、もう少し安定化要素を強めるブレーンが乱暴好きぶりをコンテインする(封じ込める)システムになるのではないかと期待します。そうでなければ、皆さん、困りますね。

司会 最近のわれわれの紙面では、これまでトランプをあまりにも乱暴ろうぜきの男としか描いていなかった。最近、リベラルな要素もあって、先生も先ほどおっしゃった中絶の話とか、年金の話とか、違う政策を持っているのではないかというストーリーを書いているんですね。つまり、ウルトラ保守みたいな書き方ではなくて、政策的に言うと弱者救済というのか、そういう部分を持っている。いま、先生がおっしゃった話だと、トランプの実際の姿は、軍事的な部分に関しては非常に危険であるという見立てですか。

トランプは軍事でもビジネスマンの発想

森本 危険と申しあげたのは何かというと、シビリアンコントロールが逆の方向から崩されるからです。きちんとした軍隊なら、民主主義の名のもとに、横暴な上官の命令を拒むということがあり得る。普通なら制服組の暴走を止めるのがシビリアンコントロールですが、ここでは逆転した破れが出ます。それでも、とにかくこうした指揮系統に問題が起きるのは非常に危険です。アメリカの軍隊が実験の対象になっては困る。

ただし、トランプはウルトラライトかということ、全然そうではありませんね。それはおっしゃるとおりなのです。そういうところはむしろ共和党らしくないところなんですね。社会福祉の問題もそうです。

それから、軍備の問題だって、彼は最終的にはビジネスマンですから、アメリカにとって損なことはしないと思います。だから、「軍備を増強して、アメリカが世界一の軍隊を持つべきだ」とは言うけれども、では、それを使って世

界中に出かけて行って「世界の警察」に再びなるのかということ、トランプは考えない。考えないことがいいか悪いかは僕にはわからない。なぜならば、これまでは、アメリカのコーズ(大義名分)があったんですよ。それで戦争をして、それもいいかどうかわかりませんが、トランプは、そんな大義名分には鼻もひっかけない。もうかるならやる、もうからないやらない。こういう意味でのプラグマティズムがあると僕には思えます。

質問 1968年の全共闘というか、学生運動のころ、田川建三さんと吉本隆明さんがくっついたり、あるいは滝沢克己さんと山本義隆さんがくっついたり、言ってみれば理念的な正統性を一応、反知性でなくて、知性の復権みたいな形で、チャーチに対応する、大学当局に対する反乱みたいなものが起こった。アメリカにおいても、こういう反知性主義に対抗する知性の反乱みたいな、正統的な理念の運動は過去にあったんですか。

森本 吉本だとか、われわれの時代にそういう仕方では知性が独立していく——難しいですね。チョムスキーみたいな人もよくいるけれども、では、反対側で知性を担っていく人はどんな人がいたか。それぞれの分野ではいると思います。だけど、先ほどのヨーロッパの話もちょっと関係してきますが、知識人という層、グループというものは、ひと昔前の日本で言うところの「論壇」みたいな話ですが、そういうものがアメリカに敵としてあったかどうか。もうちょっと個人主義的でばらけている感じがしますね。ヨーロッパには、いわゆる知識人層というのがある、固定しているような感じがします。素人判断です。済みません。

オバマ政権8年のあとに来た反知性主義 因果関係はない

質問 2008年の大統領選をアメリカで担当して、あのときもオバマが当選して熱狂の選挙戦だったわけですが、7~8年たって随分違う形の熱狂がいま行われているという感想を持っています。先生からごらんになって、何が変

わってきているのか。オバマ自体が非常に知性的な人だと思うんですが、その政権の後にこういう反知性みたいな話になっているところに何か因果関係があるのかどうか。

森本 オバマの8年の後にこれが来たところに何か因果関係があるか。あまり僕にはそう思えません。オバマ政権が知性主義あるいは反知性主義、どちらかを強めたか。あまりそういうふうには感じないですね。確たる理由があってそういうふうに申しあげているわけではないですけども。

でも、2008年のときの熱気をいま思い返してみますと、あのとき、彼は核廃絶に向けた功績でノーベル賞をもらってしまったんですね。いまから考えると、ちょっと早過ぎたかなという気がします。そういう意味では、後がポシャってきているというのは残念ですけども、スピーアヘッドというか、新しい道を開拓していった人の悲哀というものは感じます。

司会 それでは、そろそろ時間ですので、これで終わりたいと思います。

先ほど控え室で書いていただいたものは、「正統を担う」。正統というのは、きょうのレ

ジュメの4番にある「正統」です。レジティマシーという感じですか。主語がないので伺いたいですけれども、これはトランプが正統を担っているということですか。

森本 いや、違います。日本人というのは異端が好きなんです。異端好きの日本というのは有名で、丸山眞男という思想家がよく書いているんですけども、異端は、正統がないとそもそも異端にならないんです。だから、まず正統を頑張ってつくってしまおうという話です。

憲法の問題でもそうですし、私は大学の行政を担当しておりますけれども、本当にいつも文句ばかり言われている側ですよ。だけど、そこで王道を確立したいなという願いで書きました。

司会 なるほど。わかりました。

この本、何回かお話の中で出てきますけれども、新潮選書の『反知性主義』。映画のエピソードなどもたくさん入っていて、大変読みやすい本ですので、ぜひ一度手にとってみてください。最後に先生にお礼の印としてボールペンをお渡しします。(拍手)

文責・編集部

「変わるアメリカ・変わらないアメリカ——反知性主義から見た大統領選挙」

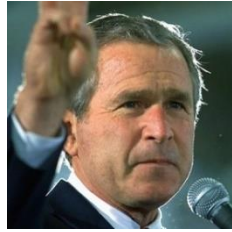
3/2/2016 日本記者クラブ
森本あんり (国際基督教大学)

1. 反知性主義の伝統

トランプ候補の人気は、アメリカ大統領選挙の歴史では必ずしも例外的ではない



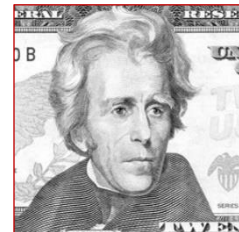
Donald Trump
(2016)



George W. Bush
(2000)



Dwight Eisenhower
(1952)



Andrew Jackson
(1828)

ジャクソン 対 ジョン・クインシー・アダムズ

- ・時代の舞台が回るとき：「ジェントルマン」の凋落、ワイルドな西部開拓のアメリカへ
- ・大衆型選挙のはじまり：バーベキュー大会 ネガティブキャンペーン ゴシップ合戦
- ・大統領としては：連邦制を確立させ、猟官制で特権の固定化を防ぐ。ただし白人中心主義
- ・パフォーマンスの達人：
"Caveat emptor: corpus delicti: ex post facto: dies irae: e pluribus unum: usque ad nauseam: Ursa Major: sic semper tyrannis: quid pro quo: requiescat in pace."

2. 反知性主義がもたらす体制変革力

ビリー・サンデー (大リーグ選手から大衆伝道者に)

"Harvardism, Yalism, Princetonism"

- ・「ハーバード」でなく「ハーバード主義」への反発
- ・知性そのものでなく、知性と権力との固定的な結びつきへの反発
- ・知的特権階級・知性の世代的固定化への異議申し立て = 「ピケティ問題」
- ・誰もが平等にゼロから出発して自分の力で成功する → 「アメリカン・ドリーム」



3. 以下の3つの問いを貫く共通の論理=キリスト教の土着化（アメリカ化）

ウィルスは、感染した宿主に影響を与えつつ、自分も変化して亜種を生む

ピール『積極的思考の力』（1952年）、レーガン大統領退任演説（1989年）

A. なぜトランプ氏は、キリスト教と無縁なのに福音派に好まれるのか？

- ・「この世の成功」=「神の祝福の証」これがアメリカ建国以来の論理だから
- ・「人の声」=「天の声」（“vox populi, vox dei”）

大前提：神は、従えば恵みを与え、背けば罰を与える。

小前提：ところで自分は成功している。

結論：それは神が自分を是認しているからに違いない。自分は正しいのだ。

B. なぜサンダース候補の支持者たちには、かくも強い不満が鬱積しているのか？

- ・この論理では「衰退」を説明できないから。「負けた」経験がないので説明できない。
- ・宗教こそ、逆転の論理を提供するはずなのだが、アメリカのキリスト教にはできない。

[参考] モイゼス・ナウム『権力の終焉』*The End of Power* (2013)

- ・市場の圧力、市民の監視、メディアの精査、社会への説明責任
- ・「参入障壁」の低下（かつては必須だった全国的な知名度・豊富な資金・集金マシン）
- ・「期待感の革命」=「もっとよい方法がどこかにあるはずだ」という確信による抗議

C. なぜアメリカの大統領選挙は、あれほど熱いのか？

- ・日本ではあり得ない大会場での政治的熱狂 = キリスト教の伝道集会の伝統
- ・大衆動員の基本的技術：戸別訪問・巡回セールス・「コミットメント・カード」
- ・健康保険制度・銃規制・同性婚への反対=みな権力に対する「セクト」的疑念の表現
- ・エスタブリッシュメントに対する宗教的な「異議申し立て」の伝統

4. 「正統」の侵蝕

- ・「軒を貸して母屋を取られた」共和党と民主党、そもそも二大政党制の制度疲労か
- ・“Make America Great Again”の“Great”を定義するのは、経済や軍隊ではない。
- ・「手続き的な正統」ではない「理念的な正統」の存在が必要

参考：「権威の蝕——正統の復権は可能か」『小説トリッパー』（朝日新聞出版）春号掲載予定